同志社人物誌　(71)

山田貞夫

河野仁昭

謹厳なる紳士

わたしは山田貞夫（敬称略―他も同）の晩年しか知らない。それも懇親会や大きな会合などでお目にかかった程度で、個人的に親しく接したことはほとんどない。ただ、わたしが同郷の出身であることをだれに聞かれてか知って下さっていて、郷里は愛媛のどこなのかと、口許をちょっともぐもぐさせるような言い方でたずねられたことがあった。その印象は全くの好々爺であった。風貌そのものがそうであった。

そういうわたしにとって、若い日の山田に直接教えを受けた人たちが語る山田像は、ちょっと意外である。その一人である西邨辰三郎は次のように回顧するのだ。

「先生は米国より帰国して三年目、いわば脂の乗りきったところ、しかも同じフランス語の組には、愛妻宣子さんの令弟宮川踵作君もいたので、一分の隙もないたしなみをもって講義をつづけられた。上等な洋服、雪のように白いカラーにカフス、銀色のカフスボタン、金縁の眼鏡、口髭に白い歯をややのぞかせて講義をされたが、人品卑しからず、気品と気骨を兼ね備えておられた」（「心にしみる思い出」『香里の丘』三十三号）

「清教徒的」であった点もあわせて、同志社では光っていたというのである。七〇〇ページ超える英語の原書をテキストに使ったという。

同じころ大学予科で教えを受けた鐙四朗は、次のように書いている。

「まず先生は当時とてもハンサムでした。きりっとした洋服と少し派手なネクタイ、紳士然とした風貌で教壇に立っておられると、何如にも同志社の教授として代表的スタイルでした」（「恩師を憶う」同右）

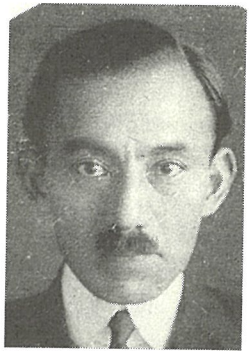
そうだったんですかといわざるを得ない。全くの好々爺の印象だったといま書いたばかりだが、そういわれてみれば身なりはきちんとしておられた。山田は定年退職した後輩の名誉教授に、引退してもきちんとした服装をしていなさい、でないと余計年寄りくさく見られるから、とアドバイスされたらしい。これはその名誉教授からわたしは直接うかがったことである。

大学予科で山田が担当したのは世界史であった。「授業はとても厳格で点数もからく」す

ごく「こわい」先生だったと、鐙は先の追悼文に書いており、西邨も、点数が厳しいので「吸血漢山田」と落書きされたことがあったと書いている。教育者としてのご自身に対する厳しさが、そういう態度として現われたに違いあるまい。ただし、たんに厳しいだけではなかったことはあとでふれる。

予科教授時代

山田貞夫の出身地は、愛媛県宇和島市北町である。明治二十四（一八九一）年三月十一日生まれだ。創立以来、同志社に学ぶ愛媛県人は多かったが、その多くは今治市や松山市とその周辺からで、宇和島市からは少なかった。同志社人がかかわりをもつキリスト教会の有無と関係があることであろう。



大学予科教授就任当時の山田先生

郷里の中学を卒業した山田が、同志社神学校に入学したのは、明治四十三年四月である。未確認だが、入学以前に洗礼を受けていたのかも知れない。

専門学校令による同志社大学が開校したのは、明治四十五年四月である。山田が在籍していた神学校は大学神学部となり、彼は大正四年三月に卒業した。そして二年後の六年九月からアメリカのハートフォート神学校に一年間学んだのち、ユニオン神学校に移る。四歳年長の大塚節治が学んだ学校である。大正九年五月、山田は同校を修了しB・D・の学位を得た。

ユニオン神学校に学ぶかたわら、山田はコロンビア大学で文明史を研究している。聴講生としてであろうか。

B・D・を得て帰国した彼は、和歌山県立商業学校で教鞭をとっていたが、大正十四年に同志社大学予科講師になり、翌十五年教授に昇進した。以後、昭和二十二年まで、予科教育に専念することになる。

その間、昭和二年に専門学校英語師範部が開校すると、山田は講師として西洋史を教える。当初は無給の兼担であった。兼担は昭和十年代までつづく。一時期、同志社高等女子部でも教えている。

鐙四朗の先の追悼文によると、授業が厳格だった山田には、次のような一面があったという。

「一人一人の境遇などは実によく知っておられ、私の親友H君やY君などは遠い故郷から出て来ており、学費の豊かでないことを見ぬかれて個人的に先生は補助され、その上に学寮への入寮を手配して下さるなど、その他学生に対する先生個人の配慮と指導は数えきれないものでした」

教室で教えるだけをこととするたんなる教育者ではなかったのである。彼の教育的配慮は教室の外にまでも及んだ。

学生監、教務主任、生徒主事などを兼務した山田が、木畑浩四郎のあとを継いで予科長を兼務するのは、昭和十七年五月であった。太平洋戦争の最中のことで、大学は学部の統廃合や規模縮小、操り上げ卒業、学徒出陣、勤労動員などただならぬ状況にあった。予科長という立場が立場だけに、山田にとっては

校長室での山田先生

生涯で最も苦悩にみちた時期であったと思われる。心ならずも矛盾を犯すことも、あるいはあったかも知れない。

山田は公にするものを書く人ではなかったようである。生涯を通じてそうであった。学生に与えたメッセージでも活字になっていないかと探してみたが、そういうものも見当らなかった。だから予科長時代のみでなく、彼自身が書いたものによって彼を知ることは、目下のところ望みがたい。

昭和二十三年三月、新制大学開設に伴い、旧制同志社大学教育の一翼をになってきた予科は廃止になり、山田は予科教授兼予科長の職を解かれた。文字通り最後の予科長であった。同年四月にスタートした新制大学教養学部の部長には、教務主任として山田を補佐してきた児玉実用が就任したのであった。

同志社高等学校初代校長

山田貞夫が新制高等学校（男女共学）創設委員長に任命されたのは、昭和二十三年一月であった。同年四月開校に向けての準備を進めるためであったが、その高校の初代校長に内定しての人事であったろう。男女共学の同志社中学校は前年四月に開校していた。山田の高校構想について、『同志社百年史—通史編II』に、次のように書かれている。

「山田貞夫校長は新制高校を旧制中学の延長と見ず、むしろその水準を旧制高校の高さにまで近づけることを意図した。従って教員の過半数は中学校からの移行者であったが、新任の教師としては大学、専門学校の教職経験者を何人も迎えたのである」

二十余年の予科教授歴と教育に対する厳格さ、あるいは理想の高さによることであろう。聖書、国語、体育、外国語その他の必修科目の他に、「自由選択制として、ドイツ語、フランス語、哲学、数学特論、理科特論、国語特論、芸術特論などの講座（一九五〇年度）」を設けた点に、山田校長の意図がうかがえると、『同志社百年史』は書いている。

教頭は中堀愛作、教務主任は高橋勘であった。校長に就任した山田は自ら聖書を担当し、外国人教員に英会話を担当させている。カリキュラムの全体を見渡してみて、山田はリベラル・アーツを教育の理想としていたのではないかと想像される。

同志社高校は昭和二十三年四月の開校から一年間、今出川校地の同志社中学校と同居し、一部は旧制予科の教室を使った。翌二十四年三月、同志社経済専門学校が今出川へ移って大学商学部に昇格することになり、同年四月から高校はその跡地である岩倉校地で授業をすることになった。中学と共に同志社英学校の流れを汲む高校としては、今出川は離れがたい土地であったろう。移転の原動力の一つは、山田の開拓者精神ではなかったかと思われる。彼にそういう一面があったことは、同志社香里中学・高等学校校長就任にもうかがえるのである。

岩倉校地は経専の跡地とはいうものの、本

館は毎年補修を要するほど老朽化していたし、高校教育に不可欠の理科教室も満足すべきものはなかった。父母の募金によって、木造平屋建ての理科教育設備を主体とする新校舎が造られたのは、移転の年の十月であった。

合併当時の同志社香里中学・高等学校

英学校の流れを中学と分ちあったとはいえ、高校はさまざまな点で草創期にあったといえる。山田が熱望していたにちがいないチャペルが、父母の寄附を主たる資金として竣工したのは、ようやく昭和三十年のことであった。だが、山田はそのとき岩倉の人ではなかった。

同志社香里中学・高等学校初代校長

「昭和二五（一九五〇）年から大阪府下香里学園を同志社に合併する議が起ると、その熱心な合併主張者の一人であった山田校長は翌年同志社香里中学校、高等学校の初代校長となって転出」したと、『同志社九十年小史』は書いている。

移転後二年、草創期の高校には問題が山積していたであろうに、山田はなぜ香里へ転出したのか。他の学内の諸問題と同様、同志社と香里学園の合併についても、わたしが知っているのは表面的な経過に過ぎない。確かなことは、「合併する議」が起こったとき、山田が法人理事の一人だったことである。彼が「熱心な合併主張者の一人」だったとすれば、それは理事会内におけることであったろう。

昭和二十六年三月の定例理事会で合併が協議されたとき、依然合併反対を唱える理事がいた。反対理由の一つは、香里近辺には公立高校二校のほか聖母女学院もあり、それらとの競争は困難だという点にあった。この意見に山田は反論して次のようにのべている。

「自分は異なった見解をもっている。むしろ同志社を志望する者が益々増加するものと見ている。大阪の私立学校はむしろ同志社の大阪進出を恐れている事情にある」

山田が「熱心な合併主張者の一人」だったというのは、おそらく事実である。このときの理事会に配布されたものとみられる「合併に関する審議報告」の中に、「我国第二の大都会たる大阪市を対象として所謂同志社教育の南進を図る」絶好の機会であり、多少の年月や人材派遣交流などを要するだろうが、「同学園を完全に同志社化し、立学の精神を徹底せしめること」に充分なる用意と確信をもって臨むべきだとあるのは、山田の意見でもあったであろう。

昭和二十六年五月八日、山田は学校法人同志社から同志社香里学園運営委員・教育委員を委嘱され、同年六月二十日をもって同志社

高校教諭兼校長の職を解かれ、同時に香里学園教育委員長に任命された（この時点では理事ではない）。高校校長の後任は中学校長の加藤延雄の兼任となった。香里学園と同志社の両理事会が合併契約書に調印したのは、昭和二十六年六月二十二日である。

香里学園教育委員長の山田には、合併によって新発足する学校の人事、カリキュラム、施設などの構想策定と準備が託されたはずである。実質的な校長の職務である。山田は同志社高校を開設した初代校長としての力量とキャリアが買われたのであろうし、「熱心な合併主張者の一人」としての自らの意見に、新生同志社香里に献身するというかたちで責任を負おうとしたのではないか。言行不一致の人ではなかったのだ。

山田委員長の部屋は有終館の一室が当てられた。「同志社香里学園仮校長室」だったと西邨辰三郎は「合併当時の思い出」（『香里の丘』四十号）に書いているのだが、それが正式な名称だったかどうかは確認しがたい。同志社中学校の教諭であった西邨は、その部屋へ呼ばれて香里へ移るよう山田から何度も説得されたのだという。西邨ひとりではなかったろう。同志社高校とは比較にならぬ難問題が多かったと思われる。

同志社香里中学校・高等学校校長を命じる旨の辞令が出たのは、昭和二十六年九月一日であった。二度にわたって初代校長をつとめたのは、同志社の歴史の中で山田貞夫だけではないか。ただし、社長もしくは総長の校長兼務時代は別である。新校長および新任教諭の着任式が九月十四日に香里でおこなわれ、山田校長のもとで同志社香里の幕が開かれた。

初代教頭をつとめ、山田のあとをうけて二代目校長になる下山敏男は、合併当時を回想して次のように書いている。

「小生も合併当初から一教員として、奉職いたしました関係から、山田校長が最も苦心され、最大関心事とされたことが、何であったかということを、よく承知いたしております。すなわち民主主義の基礎であるキリスト教精神、すなわち同志社創立者の新島先生の教育方針を、生徒諸君に徹底させるということでありました」（同志社香里中学校・高等学校『二十年の歩み』）

香里においても山田が担当したのは宗教であった。これはそれまでの香里学園にはなかった科目であり、礼拝などと共に香里に同志社教育を植えつける重要な鍵であった。

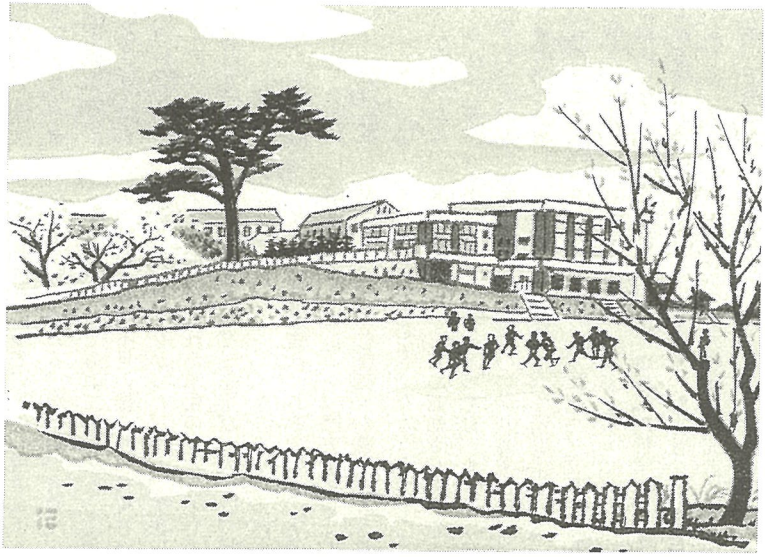
合併後まもない昭和三十年ころの九月、台風で授業を午前中で打ち切り、生徒たちを帰宅させたことがあった。当時補導主任であった生島吉造は、そのとき山田校長に激しい叱責をうけたというのだ。

「午後になると全校の生徒たちは教職員とともに、京阪電車が不通になるまえにと、豪雨の中を駅に急いでしまった。私は校長と宿直の人たちに挨拶をして下校しようとしたとたん、山田先生は、『君は全校舎を見廻ったか。生徒が一人も残っていないのを確認せずに帰宅するのはけしからん』という意味のはげしいお叱りをうけた」（「忘れがたいこと二つ」『二十年の歩み』）

厳しくかつ責任感の強い教育者山田ならではの感を受ける。その人柄と経歴から察して、山田は存在それ自体が同志社教育の象徴のようであったに相違あるまい。

定年退職以後

昭和三十一（一九五六）年三月末をもって定年退職した山田貞夫は、その後同志社大学文学部の嘱託講師として英語を教えていたが、同志社創立九十周年をひかえて記念事業の募金運動を実施することになり、昭和三十七年から四十一年まで記念事業事務局の嘱託として奉仕された。同志社大阪事務所が彼の主たる勤務場所であった。

募金運動を終えてまもない昭和四十四（一九六九）年夏、野尻湖に静養に赴いていた山田はそこで発病し、九月二十五日長野日赤病院で七十八年の生涯を閉じた。その教育者としての生涯はまさに地の塩であり世の光であった。さらにいえばフロンティア・スピリットの持ち主でもあった。

（社史資料室長）